



大学入門ゼミ 小豆島一日研修 (1年次)



教育実習 (3年次)



香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.7



未来からの留学生 (2年次)



教職実践演習 (4年次)



PICK UP NEWS 2年次「教育実践プレ演習」授業改善に取り組みました。

一昨年度(平成29年度)本学教育学部において実施した 第18回 学部・附属学校園教員合同研究集会において「アクティブ・ラーニングを中心とする教員養成の在り方について」をテーマに話題提供・議論がなされました。(→詳細は、センターニュースNo.6を参照ください。)

この研究集会のパネリストの一人、附属高松小学校の橘慎二郎先生より「学生は(教え方の)形から入るのではなく、子どもの学びをしっかりと読み取ること(子ども理解)が重要」とお話をいただきました。

このメッセージを受け、平成30年度 附属高松小学校 橘先生と連携し、3年次の教育実習を控えた2年次の実地教育カリキュラム「教育実践プレ演習」を見直し、授業改善に取り組みました。

附属高松小学校のある学級における、多様な学習活動場面を収録し、動画教材として編集したものを2年次学生に提示し、学生個人として子ども理解に挑戦させた上で、小グループで子ども理解の妥当性などについて議論を促しました。本年度(2019年度)も授業改善をさらに加え、取り組みを進めていく予定です。



センター長あいさつ/2019年度 附属教職支援開発センター 事業計画	2
[特集] 第19回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて	3
第19回 学部・附属学校園教員合同研究集会 研究グループ報告	4~7
教育実践集中講座 実践報告	8
実地教育 この1年~2018~	9
平成30年度 センター公開講演会 報告	10
附属学校園 この1年~2018~	11~14
平成30年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告	14
寄贈図書	15
教職支援開発センター活動報告/教育実践総合研究(第40・41号)原稿募集	16

センター長 あいさつ

昨年4月に、センター長に着任（併任）してから、1年が過ぎました。この1年は早く過ぎたようにも、遅く過ぎたようにも思え、まだ自分自身の中で整理しきれていません。しかし、センターにとって、この1年は変動が集約した少々特異な時期だったのではないかと思います。具体的には次の通りです。

本センターは、平成27年に現在の名称となり、①実地教育推進、②教職支援推進、③教育開発推進の3つの部門が設置されて、それぞれの事業が展開されてきました。しかし昨年度、規程改正が議論され、今年度からは、1部門の増加と、一部の部門名称の変更が認められ、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の4部門で事業を進めていくことになりました。新たに教員研修推進部門が設置された背景には、教員採用の後の教員研修にも、大学が深くかかわる必要性が出てきたことがあります。従来は、学生が教員として就職するまでが教員養成学部の役割でしたが、学校現場でより高い教育の質を保つには、大学も積極的に教員育成にもかかわる必要となってきました。このことは教員免許更新とも関連し、従来にも増して連携が必要とされるところです。また全国的にもICT教育の重要性が認識され、教育開発/ICT推進部門の名称はこのことを反映しています。技術革新により物事が大きく変わることは多々ありますが、教育の現場でのICTの影響は未知の部分が多く、より良い教育を行うには、より多くの実践とそれに基づく研究が必要であると思われまます。これについても、学内外との連携が重要になってくるでしょう。



このようにセンターの役割は変動しており、その重要性は増していますが、反面、これを支えるスタッフの数は変わっていません。3年以上前と比べると、むしろかなり減っています。この状況において事業を展開するには、センタースタッフの奮闘に加え、センター内外・学内外の方々との一層の連携が不可欠です。こういったことを、肌身で強く感じた、というのが私の1年でした。

附属教職支援開発センター長 松村雅文

2019年度 附属教職支援開発センター 事業計画

- 1 実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）** <実地教育委員長(若井)、センター>
 - (1) 「大学入門ゼミ」「教職概論」(1年次) <教員養成課程主任(松村)、松下>
 - (2) 「教育実践プレ演習」(2年次) <未来留担当(上野)、松下>
 - (3) 「教育実践演習」(事前事後指導) (3年次) <センター長、山岸・佐藤(盛)・久米>
 - (4) 「教職実践演習」(4年次) <実地教育委員長(若井)、山岸・佐藤(盛)・久米>
- 2 教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）** <学生支援専門委員長(野崎)、センター>
 - (1) 教職志望学生への日常的支援活動
<学生支援専門委員長(野崎)、宮前(義)・植田・山本・佐藤(盛)・大熊・久米・片岡・宮前(淳)>
 - ・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
 - (2) 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動<同上>
 - ・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
 - (3) 教育実践集中講座の開催 <松下、仲西・伊賀・岡>
- 3 教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）** <高度教職実践専攻長(武蔵)、センター>
 - (1) 現職教員への研修支援活動<高度教職実践専攻長(武蔵)、センター長・山岸・佐藤(盛)・大熊・久米・関係教員>
 - ・指導力向上のための公開講演会等の開催
 - ・教職大学院現職教員研修への協力
 - ・学内の現職教員研修各種プロジェクト(教員免許状更新講習を含む)への協力
- 4 教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）** <附属担当副学部長(北林)、センター>
 - (1) 教材・資料の収集・管理・活用支援 <センター事務・松下>
 - ・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
 - (2) ICT機器の活用支援 <松下・センター事務>
 - (3) 研究活動の報告等 <センター長・松下・山岸・センター事務>
 - ・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
 - (4) 関係機関との連携 <附属担当副学部長(北林)、センター長・山岸・松下>
 - ・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等
- 5 その他**
 - (1) 広報活動 <松下・センター事務>
 - ・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
 - (2) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導<山岸・松下>

【事務補佐員 着任のご挨拶】

本年4月より、教育学部附属教職支援開発センターの事務補佐員として採用になりました濱田敦子と申します。学校や地域に身近な教育機関として、様々なお問い合わせやご相談に対応できるよう一生懸命頑張り、少しでも皆様のお役に立てるよう努力して参ります。今後ともよろしくお願ひ致します。

第19回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

センター長あいさつ
2019年度教職センター事業計画
特集 第19回学部 附属学校園
教員合同研究集会を終えて

副学部長(学部附属連携担当) 野崎 武司



平成31年3月4日に、第19回学部・附属学校園教員合同研究集会が開催されました。総勢171名(学部65名 附属106名)の参加で盛大に行われました。全体テーマは、昨年同様に「『主体的・対話的で深い学び』をめぐる教員養成のあり方」でした。本年度の全体会は、「ICTによる『主体的・対話的で深い学び』の支援」と題して、ICTを活用してインタラクティブな授業を展開できる教員養成の可能性に迫ることとなりました。



まず、コーディネーターの宮崎英一先生(技術領域)から、「ICTと学校教育のこれから」と題したミニ講義が行われました。ICTは人と人の関わりを支えるツールとしての先端技術であることが提示されました。新学習指導要領では言語能力と並び情報活用能力に焦点が当たっており、附属学校の先進的な取り組みから、教員養成のあり方を見直したいという趣旨が述べられました。

次に増田一仁先生(附属高松中学校)の「ICTと創造表現活動」の報告がありました。中学生ともなると普通の授業の中で気づきがあっても口に出さないという傾向が強まります。それが卒業に向けた思いをタブレットを使って映像にするなど、主体的関わりを引き出す活動(創造表現活動)では積極的に議論する姿が生まれるとのことでした。



中家啓吾先生(附属坂出小学校)から「ICTと教科学習」の報告がありました。小学校の国語科などで教師作成のICT教材が大きな効果を発揮するなどリアルに伝わりました。子どもがタブレットで撮影しあった映像などはメタ認知を促し、よさの共有、思考の手がかり、話し合いの根拠などを提供することになり、学びを深める効果があるとのことでした。



藤澤麻子先生(附属特別支援学校)から「子どもを学びの主体にするICT」の報告がありました。数々の事例から、ICTは、「自分でできる」を増やし、もっと伝えたいという意欲や相手意識の醸成(もっと人と関わりたい)にも効果的であるとのことでした。ICTの「授業での活用」を「生活場面での活用」に広げ、子どもの豊かさに繋がりたいとのことでした。

教育とICTを巡る討議の中で、学生に学んで欲しいこととして、「子どものニーズを見る目(ICTのどんな支援が子どもを生かすのか)が重要」との意見がありました。今回の報告のいずれも、附属の先生方の深い子ども理解に根ざした教育実践であることに気づかされました。また目指す子どもの姿を実現するためのICT活用であることも強調されました。ICTという機械を指し示す言葉の背後に、教育の本質的な柱が貫かれていることを再確認できました。



「第一部 全体会」会場点描

研究グループ報告 ①〜⑧

研究グループ報告 ⑨〜⑮

平成30年度 教育実践集中講座 報告
実地教育この1年2018

平成30年度 公開講演会 報告
附属学校園 この1年2018
(附属幼・附属高松園舎)

附属学校園 この1年2018
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

平成30年度 センター協議会 報告
寄贈図書
附属学校園 この1年2018
(附属特別支援)

1 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究－判断力の育成－

佐藤明宏、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中、附属特別支援

読み書きの能力は、言葉に関係付けて(思考)、発信して(表現)いく力であるが、その「思考」したことを「表現」へつなぐ重要な働きを担っているのが「判断力」である。ある事柄の二つの側面を分析・思考して、自分がそのどちらを選択して表現するかという自己の決断場面で判断力が働くのである。そこで我々は、読み書きに困難な児童生徒に対して、この自分の「判断力」をどう育てていくべきかということの研究に取り組むことにした。



2 多声的保育アセスメントの開発

松井剛太、附属幼稚園高松園舎

保育の質の確保・向上については、国内外において、具体的な実践の方策が積極的に議論されている。附属幼稚園高松園舎では、今年度、子どもの声を保育実践に反映するための方策として、写真投影法を試行・検証した。

写真投影法とは、子どもたち一人ひとりにデジタルカメラを渡し、園内で自分の好きな場所を撮影してもらい、その理由を聴き取ることで子どもたちがどのように周囲の環境をとらえているかを知るものである。当日は、7月と12月に行った2回の写真投影法から聴き取った子どもの声とそれを受けて行った実践の改善、及びその後の子どもたちの遊びの変化を報告した。

その結果、子ども理解、環境の見直しの点から改善点が見つかり、実際に環境を変えることで、子どもたちの遊びが深まる様子が観察された。一方、どのような時間帯に実施するのか、使用するカメラ等、子どもたちの生活を阻害しない実施方法の検討が課題として残った。



3 デザイン思考に基づくアクティブラーニング型社会科授業開発に関する基礎的研究

鈴木正行、高倉良一、守田逸人、附属高松中、附属坂出中

合同研究集会では、＜デザイン思考＞の中核をなすダブルダイヤモンド・デザインモデルの観点から、以下の授業実践の構造を分析・考察した成果を発表した。

(A) 中学校社会科歴史的分野で設定した大単元である《学習のくくり》「民衆の時代へ」(40時間)を対象として、大単元レベルにおける発散的思考と収束的思考を導く構造について考察した。《学習のくくり》は、「ガイダンス→つかむ学習→追究する学習→つなげる学習」という各段階によって構成されている。「追究する学習」では、それまでの学習を大きく振り返り、共通テーマに基づいて個人テーマを設定して追究活動を行う。「つなげる学習」では、追究の成果を小グループで交流する。とくに、「追究する学習」から「つなげる学習」の場面で、リフレクション(学びの省察)と再構成が行われ、発散と収束がなされることを示した。

(B) 歴史的分野の開発単元「軍国主義と日本の行方」を対象として、1時間の授業レベルにおける発散的思考と収束的思考の発動場面を抽出した。ダブルダイヤモンドの結節点において、リフレクション(問い直し)と再構成を導く揺さぶりの問いの重要性を示した。



4 中学校生徒の数学理解において内面では何が起きているのか

佐竹郁夫、附属高松中、附属坂出中

小学校の算数はわかったのに、中学校の数学はわからなくなったという中学校生徒、さらには中学校の数学はわかったのに、高等学校の数学はわからなくなったという高等学校生徒について、わからなくなった真の理由を探ることが研究の目的である。今年度は、小学校段階でも取り扱いがあり、引き続いて中学校でも学ぶ「比例・反比例」、「平行四辺形」、「合同」について、附属坂出中学校、附属高松中学校の生徒全員に対して、「小学校での扱いと中学校での扱いの違い」を生徒がどう受け止めているかをアンケートにより調査した。同じ題材を異なる扱いをしている単元に焦点を絞ることで、異なる扱いを正確に理解して新しい扱いを受容している生徒と、異なる扱いが認識できていない生徒、異なる扱いを受容できない生徒を分類し、その傾向を把握することができた。これについて附属小学校の算数、数学の教員の方のみならず、附属や大学の社会科の教員の方々から、様々な参考になるご意見を賜ることができた。



5 科学的探究能力を伸ばすための指導と評価の研究（その2）

笠 潤平、附属高松中、附属坂出中

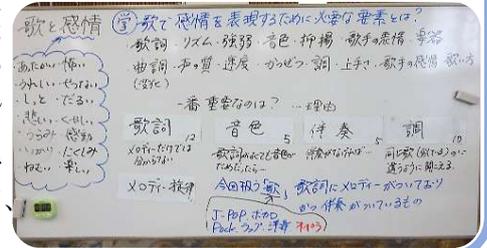
本プロジェクトは、昨年度に引き続き、理科における「探究活動」や「探究的な学習」というものをどのように捉え、生徒の科学的な探究能力をどのように伸ばすかという課題について、理科新学習指導要領における「探究」への言及を相対化しながら、多面的かつ実践的に検討するものである。当日の会場では、本プロジェクト全体の趣旨に加えて、予稿集に掲載した報告のうち、附属坂出中学校における探究型の授業の開発、附属高松中学校における実験ノート（ラボノート）の活用、学部における「科学的な説明の能力を育成する（小中高用）授業プラン」の研究についてポスター発表を行った。また、本年度も附属高松中における実験ノートの実物を展示した。その結果、発表者にとり自らの研究を振り返り、お互いの研究について交流し、よいフィードバックを得る機会となった。



6 平成29年改訂学習指導要領に基づく新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における西洋音楽の教材化に関する実践的研究

岡田知也、附属坂出中

本研究では「新たな視点」として「新しい時代に必要となる資質・能力」のうち「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性』の涵養」に焦点をおき、教材曲として歌劇「アイダ」を用い、特に歌唱による登場人物の感情表現に着目することを学習内容の中心軸とする授業を構築し実践した。生徒自身の音楽体験と結びつつ「音楽表現の共通性や固有性」について学習を深めていく中で、特に歌唱の感情表現における音楽の諸要素の知覚に着目することで鑑賞の視点が明確となった。また、生徒が体験を表出する活動を行うことで、自分がどのように「歌」を捉えているのか、自身の「歌の聴き方」が明確となり、それを活用して鑑賞を行ったことで学びは主体的なものとなり深まっていた。最近、音楽科における教科の本質を、いわゆる「新学力観」以前の文脈で強く主張する声を耳にした。新しい思潮に逆行するこの声を反面教師として、自身には「不易流行」を深く刻み真摯に研究に臨みたい。



7 「鑑賞」と「表現」の一体化を目指した鑑賞教育の授業開発

吉川暢子、附属高松中、附属坂出中

本研究では鑑賞の授業における表現と鑑賞の相互関連をどのように図るのか重要な課題であるとし、附属中学校の生徒のアンケート調査から鑑賞の授業に関する実態を明らかにした。「鑑賞の授業が好き」という生徒は増加しているが、美術の授業よりも鑑賞の授業はあまり好きではないという結果が明らかになった。また「作品づくりはできないが、鑑賞なら私でもできるから」「絵を描いたりする時間が無く、見るだけだから」「絵を自分で描くよりはまだから」「感想を書くだけで楽」といった意見や「自分でつくる（描く）ほうが好き・楽しい」といったような鑑賞よりも制作を行いたいという生徒がいた。このことから美術の授業において「鑑賞」と「表現」とは表裏一体であり、独立して働くものではなく、相互に造形的な力や表現力を育てていかなければいけない。よって、今後さらなる生徒の学びの獲得を目指し「鑑賞」と「表現」の一体化を目指した新しい鑑賞教育を提案し、実践したいと考えている。



8 「語ろうデー」の実施における参加者と実践者の気付き

片岡元子、吉川暢子、松井剛太、附属幼稚園

幼稚園等における園内研修は、保育の質の向上や保育者の専門性を高めるために重要なものであるが、研修時間の確保や教師の主体的な参加が困難であるなど、課題も指摘されている。そこで、附属幼稚園では、保育実践や保育討議を公立の幼稚園等にひらくことで、地域の幼児教育の充実や各園の園内研修の活性化に寄与したいと考え、「語ろうデー」を実施した。「語ろうデー」への参加者は、子どもの見取りや遊びに対する考え方は様々であり、多様な視点を出し合うことで自分の保育観が広がることを実感したともに、温かな雰囲気や教員集団の関係性が重要であることを感じた。一方、実践者である附属幼稚園の教員は、公立園の現状や課題に気付き、地域の幼児教育の充実のために発信していくことの必要性を感じた。引き続き、「子どものいる教員研修学校」としての附属幼稚園の役割を踏まえ、自園の保育の充実と地域への発信という2つの使命を担う「語ろうデー」の実施について検討していきたいと考えている。



センター長あいさつ
2019年度 教職センター事業計画
【特集】第19回学部 附属中学校園
教員合同研究会を終えて

研究グループ報告 ①～⑧

研究グループ報告 ⑨～⑮

平成30年度 教育実践集中講座 報告
実地教育この1年2018

平成30年度 公開講演会 報告
附属中学校園 この1年2018
(附属幼・附属幼高松園舎)

附属中学校園 この1年2018
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

平成30年度 センター協議会 報告
寄贈図書
附属中学校園 この1年2018
(附属特別支援)

9 ICTを活用したアクティブ・ラーニング教材開発

高木由美子、附属坂出中

学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議最終まとめから、これからの学習活動を支えるICT環境の例示と附属坂出中学校のICT環境について比較検討を行った。現代に生きる児童生徒はこれからの社会において、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められている。学校におけるICT環境整備には、学校用ICT機器等の低価格化に向けた具体的な検討を早急に行う必要があることはもちろんであるが、授業を受ける児童生徒によるICT授業の評価を行うとともに、授業にICTを導入する教員がメリットを実感できるようなサポート体制の構築を早急に進める必要がある。附属坂出中学校の実践研究を通してICT活用を行う視点からの研究を継続し、デジタル教科書の導入など、今後、大学との連携によるICT機器の導入効果について明らかにしていきたい。

外国語

【単元】Special Project : 知りたい情報を引き出そう

内容：4人班活動で2組に分かれてダイアログを録音し、

- ・英語らしい発音
- ・ジェスチャー

など幾つかの観点について会話している生徒、記録している生徒がお互いに確認し、振り返りに生かす。



10 全天球撮影カメラと透過型HMDを利用した教材呈示システムの開発

黒田勉、附属高松中、附属坂出中

VR、ARの進展に伴いヘッドマウントディスプレイ（以下HMD）の低価格化や軽量化が進められ、眼鏡程度の大きさ・重さの透過型HMDが実用化されている。特に透過型HMDは、目の前を見ながら画面を呈示することが可能で、実作業を行うと同時に、師範の動画像を見ることができるといった利点がある。本研究では、この透過型HMDを用いた教材呈示用ビデオ教材の作成を行うと共に、問題点の洗い出し、評価方法の考察、ならびに教材コンテンツ提案を行った。今回は、全天球撮影カメラを使用したデモンストレーションを行い、その利用方法について討議を行った。



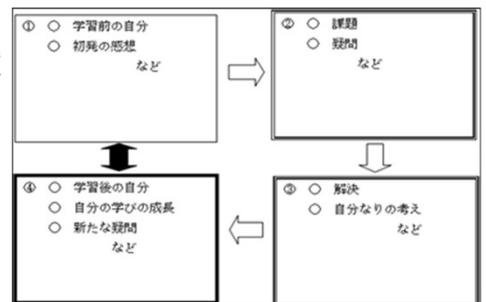
11 国語科におけるストーリーマップを活用した「学びのものがたり化」に関する研究

山本茂喜、附属坂出中

今年度は、ストーリーマップを用いた「学びのものがたり化」について共同研究を行った。

本研究は、附属坂出中学校国語科と山本茂喜が共同で開発したストーリーマップというフレームを導入し、学びの「ものがたり化」を視覚化することによって、より効果的に学びの実感を獲得できることを目指すものである。発表会の場では、数々のご助言をいただくことができた。

また、今年度にはこれまでの成果をもとに、『思考ツールで国語の「深い学び」』（山本茂喜編著・東洋館出版社）を上梓することができた。共同研究の成果としては三冊目の出版となる。これまでのご支援に深く感謝する次第である。来年度以降もさらに共同研究を深化させるとともに、今回のテーマでの研究書を公刊したいと考えている。



12 アプリを活用した地域安全マップ作成と従来の地域安全マップ作成による小学生の防犯意識の比較

大久保智生、附属高松小

犯罪機会論に基づいた地域安全マップ作成活動は防犯意識の向上に有効な手段として全国各地で実施されている。今回、ICTを活用した地域安全マップ作成活動の効果について検討するため、従来の紙ベースの地域安全マップ作成活動と比べて、小学生の防犯に関する能力と防犯意識に及ぼす影響に違いがあるのかを明らかにした。地域安全マップ作成活動の効果を検討するため、3学級のうち、1学級をICTを活用した地域安全マップ作成活動を行うタブレット群、1学級を従来の紙ベースの地域安全マップ作成活動を行う紙媒体群、1学級を地域安全マップ作成活動を行わない統制群に割り当てた。事前事後で効果の検証を行ったところ、従来の紙ベースの地域安全マップ作成活動を行う紙媒体群が完成度が高く、最も教育効果があることが示された。また、ICTを活用した地域安全マップ作成活動を行うタブレット群も教育効果が示されたが、授業内容の改善の必要性も示唆された。



13 算数科における互いに磨き合い、学び続ける子どもの育成

松島 充、附属坂出小

本研究は、小学3年「三角形」の学習において、子どもたちがどのように学んでいたかを質的に分析することを目的とした。分析枠組みは、Sfard (2008) のコモグニション論を用いた。1つの班と学級全体の対話記録から、6つのナラティブが同定された。これらの6つのナラティブが何についてのディスコースかを分析すると、後半3つのディスコースが「ディスコースについてのディスコース」、つまりメタディスコースであり、このメタディスコースを支えるルールとして、メタディスコースのルール（メタルール）「どんなときに三角形ができるのかを一般的に説明する」が同定された。このメタルールはどのように発達したのか。その要因として他者との対話が挙げられた。対話がなぜメタルールを発達させるのか。それは、現在自分が抱えている問題についての他者の考えを聞くことは、自分の考えを反省的に振り返るよい機会となるためだと考えられる。対話には、反省的思考を誘発する機能もあると解釈できる。



14 学部と附属による若年教員向け研修動画コンテンツの開発

十河 妹、附属坂出中

香川県教育センターでは、Web上にオンライン研修サイトを開設し、教職員研修のより効率的・効果的な実施を目指している。サイトの提供する研修動画コンテンツを附属坂出中学校と協力して開発することで、教員研修の充実に貢献したいと考え取り組んだ。内容は、香川県教育委員会との連携による教員研修システム共同開発委員会において、特に要望のあった若年教員向けの授業力向上を目指すものとした。

事前準備から撮影・編集、アップロードまでの開発の過程や、質問紙調査結果等についてまとめた。解説動画の撮影では、より自然な形で若年教員に語りかけるようにするため、インタビュー形式を採用した。現職教員、学部生へのアンケートでは、「画像や音声良かった」や「新たな気づきや学びがあった」の項目で高評価を得た。一方、テロップの色や大きさの工夫や効果音やBGMの改善等、課題も明らかになった。



今後は、アップロード後の追跡調査を検討し、より効果的な研修動画コンテンツの開発に取り組みたい。

15 中学校技術におけるVisual Programmingを用いた情報授業の開発 ～深い学びをめざして～

宮崎英一、附属高松中、附属坂出中

新学習指導要領において、中学校技術分野では「生活に関わる技術の見え方」、「生活の課題を見出し、解決できる力」、「生活を工夫し創造する実践的態度」等の重要性が述べられている。我々の日常生活においてコンピュータを中心としたICT機器の発展はもはや必要不可欠なものとなっている。しかし、児童・生徒にとって、これらはブラックボックスであり、その中身について考察するまでには及んでいない。

そこで本研究では新学習指導要領における目標を達成できるような、コンピュータのプログラム教育教材の開発を目指した。ここではVisual Programmingを用いることで、従来のプログラミング教育では実現できなかった対話的な授業が実現できるような授業システムを提案した。



「第二部 個別発表 会場点描」

センター長あいさつ
2019年度 教職センター事業計画
【特集】第19回学部 附属学校園
教員合同研究会を終えて

研究グループ報告 ①～⑧

研究グループ報告 ⑨～⑯

平成30年度 教育実践集中講座 報告
実地教育この1年2018

平成30年度 公開講演会 報告
附属学校園 この1年2018
(附属幼・附属幼高松園舎)

附属学校園 この1年2018
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

平成30年度 センター協議会 報告
寄贈図書
附属学校園 この1年2018
(附属特別支援)

先生になろう！ ～自己の成長を教職に進む自信に～

東条 直樹 ・ 山田真粧美 ・ 大林 克暢 ・ 岡 静子

第一期 (4～9月)

- | | |
|--|--|
| [第1回] 5月14日(月) 教職理解
「教職の魅力 教職とは」(山田) | [第6回] 7月2日(月) 道徳教育
ケーススタディ
「子どもの心を耕す道徳の授業」(山田) |
| [第2回] 5月14日(月) 学級経営
「子どもの成長と学級経営」(岡) | [第7回] 7月9日(月) 子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡) |
| [第3回] 5月19日(土) 教育法規Ⅰ
「教員になる①」(東条)
「教員になる②」(山田) | [第8回] 7月20日(金) 子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡) |
| [第4回] 5月26日(土) 教育法規Ⅱ
「教員になる③」(東条)
「教員になる④」(山田) | [第9回] 7月25日(水) 子ども理解
「附属学校参観の心がまえ」(東条) |
| [第5回] 6月18日(月) 生徒指導
ケーススタディ
「生徒理解を基盤とした生徒指導」(山田) | |

第二期 (10～3月)

- | | |
|---|--|
| [第1回] 10月19日(金) 教育課題の探求
「いじめと体罰」(山田)
「教員としての倫理観」(岡) | [第8回] 12月6日(木) 生徒指導
ケーススタディ「小学校における
生徒指導上の実際問題」(岡) |
| [第2回] 11月19日(月) 教職理解
「魅力ある教師をめざして」(岡) | [第9回] 12月10日(月) 教職理解
「授業とは 保育とは」(東条) |
| [第3回] 11月19日(月) 教育の最新情報
「教職への道Ⅰ(教師に求められる力)」(東条) | [第10回] 12月12日(水) 人権教育
「学校教育における人権教育
小学校での取組事例に学ぶ」(岡) |
| [第4回] 11月22日(木) 生徒指導
ケーススタディ
「生徒指導ケーススタディ」(東条) | [第11回] 1月15日(火) 道徳教育
ケーススタディ
「子どもの心を耕す道徳の授業」(大林) |
| [第5回] 11月28日(水) 教育実習事後指導
「教育実習を振り返って」
シンポジウム・助言(東条・岡) | [第12回] 1月21日(月) 子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡) |
| [第6回] 11月30日(金) 校種別による選択実務研修
「はばたけ若き力を生かして～4月からの
心がまえ～」中学校(大林)・小学校(岡) | [第13回] 1月21日(月) 学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」(岡) |
| [第7回] 12月3日(月) 教育の最新情報
「教職への道Ⅱ(教育課程と学校評価)」
(大林・東条) | [第14回] 1月28日(月) 子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡) |

今年度は、採用試験への意識をより早期に持つことが重要と考え、従来、採用試験直前の4年生に行っていた「教育法規入門」を「教職の総合的研究」として3年生にも実施しました。

私たちは受講生の様子から伺える印象として、カリキュラム変更の効果があつたと受け止めています。18時からという遅い時間の講義であったにも関わらず、受講生は大変意欲的に実践演習に取り組んでいました。主免の教育実習が終了して間もない時期であったことも、目的意識をもった受講につながったのではと考えます。児童・生徒の反応を具体的に想像しながら、授業の指導技術や生徒指導の手法を学ぶことができたのではないのでしょうか。積極的に受講した学生は、教職に向けて一步前進できたのではないかと思います。

新学習指導要領の全面実施をひかえ、学校現場には外国語やプログラミング教育等、新たに加わる内容への準備が求められています。また、社会的に大きく取り上げられている時間外労働、いじめや不登校の対応等の問題もあり、教師という職業には多くの苦労や困難があります。しかし、教職は子どもたちの純粋な心に触れ、自分を磨くことができるすばらしい職業です。未来を生きる子どもたちを育てるということは、未来を創る仕事と言っても過言ではありません。受講生には香川大学での講義で培った教師力を糧とし、教職に「夢」をもち、「笑顔」で進んでくれることを期待しています。



附属教職支援開発センターにおける 2018年度の実地教育の取り組みについて 簡単にご紹介します。



教育実習

事前指導では、1, 2年次の学びを再確認するとともに、教育実習へ向かう心構え、また学習指導案づくりをはじめとした授業づくりの課題を深めます。

教育実習に入ると、はじめは戸惑いがちですが、終盤になると生き生きとした表情に変わりそれぞれの自己の課題を見出していきます。

3年次

実地教育テーマ 「授業理解」

1年次

実地教育テーマ 「学校理解」

1年次生は4月末、小豆島に一日研修に向かいます。『二十四の瞳』の舞台である岬の分教場を訪問し、壺井栄記念館の館長先生からお話を伺う活動などを通し、自らの目指す教師像を考えるきっかけとして、『二十四の瞳』と出会い、感じ、考える学習から、学校教育教員養成課程1年生の学びが始まります。



大学入門ゼミ・教職概論



教職実践演習

4年間の学びの総決算にあたる演習です。これまで学んできた教育に係るさまざまな内容や問題を再確認するとともに、グループ

ワーク等を通して問題解決能力の更なる向上を図っています。

4年次

実地教育テーマ 「教職理解」

2年次

実地教育テーマ 「子ども理解」

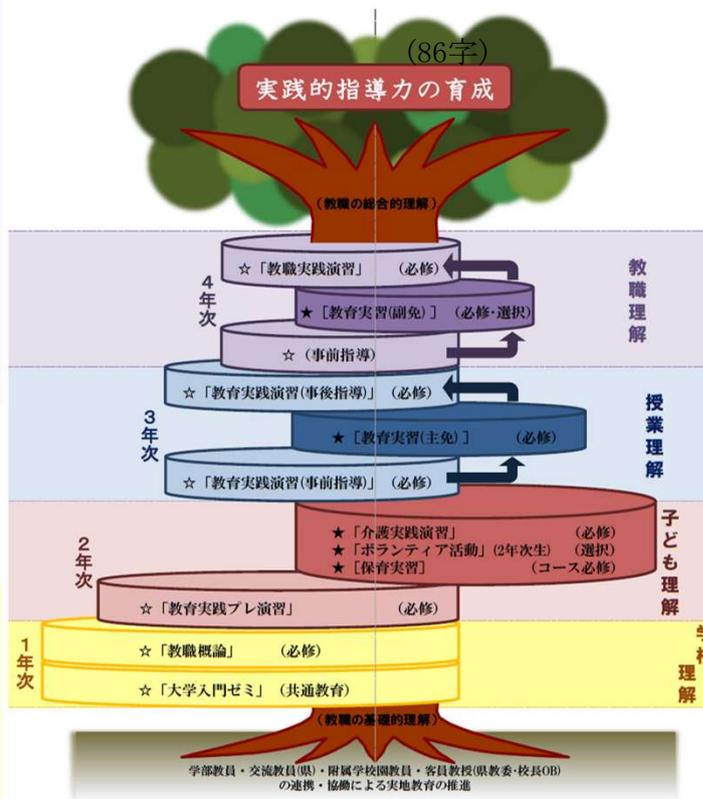
「子ども理解」とは何か、何のために行うのか、何を・どのように行えばよいのか。

2年次生は、映像を手がかりに子どもたちの言動を分析したり、実際に子どもたちと関わる活動(「未来からの留学生」など)において子どもたちを支援したりしながら、教育実践における「子ども理解」の意味を考えています。



教育実践プレ演習

4か年を見通した実地教育プログラム



どう生かす、活用する“Let's Try!”、“We Can!”の『活用』と『評価』の実際

講師：宮城教育大学教育学部准教授 鈴木 渉 先生

平成30年10月20日(土)、「どう生かす、活用する“Let's Try!”、“We Can!”の『活用』と『評価』の実際」とのテーマのもと、昨年に引き続き宮城教育大学教育学部 鈴木 渉 准教授に基調講演をいただき、続いて、シンポジウムでは、鈴木先生とともに、香川県教育センター 清水由美 指導主事と高松市総合教育センター 青江 歩 指導主事の3名のパネリストの先生方をお迎えし、86名の参加者を得て、公開講演会が開催された。

松村雅文 教職支援開発センター長の開会のことばから講演会が始まり、続いて、香川県教育委員会を代表して、小柳和代 義務教育課長にごあいさつをいただいた。おふたりとも冒頭、流暢な英語でごあいさつをされ、この講演会がこれからの英語教育を発展、充実させることを目的としたものであることを明瞭に方向付けていただいた。



さらに、香川大学では文部科学省の委嘱を受けて小学校の先生方が中学校教員免許状外国語科(英語)の2種免許状を取得するための認定講習を実施している。免許を取得された多くの先生方のために今回の講演会をフォローアップ研修と位置づけことから、香川大学教育学部 毛利 猛 学部長からも香川大学の小学校英語教育に対する取組などについてお話していただいた。

基調講演とシンポジウムの概要は、まず、鈴木先生が基調講演で『評価』について十分な時間を取り、分かりやすく解説された。「『評価』する」とよくいわれるが、まず『評価』の時期、そして『評価』の方法について、例えば、「アルファベットの大文字を書くことができる」ことの評価方法は、授業中のワークシートへ書き込みの確認やペーパーテストを通して確認する。「できる」の『評価』は、単元の終わりや単元の途中で行うことだけでは不十分で、複数の単元を学習した後や学期末、さらに、年間を通して機会あるごとに確認することが必要であることなどが説明された。また、外国語科の「読むこと」「書くこと」については、中学年の外国語活動では指導しておらず、慣れ親しませることから指導する必要がある、「聞くこと」「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことに留意することなどについて、詳しくご説明いただいた。



次にシンポジウムでは、清水先生、青江先生から県と市の教育委員会の小学校英語にかかわる施策についての説明の後に、現場が抱えている代表的な疑問点や課題をあげていただき、鈴木先生がそれに回答する、という形でシンポジウムは進行した。フロアの皆様からも質問を受け過不足なく3名の先生方にはご回答いただいた。



また、フロアには高松市総合教育センター 篠原 隆則 所長も参加されていた。その後、時間となりシンポジウムは3名のパネリストの先生方からまとめのお話をいただいて終了した。全体的に、『評価』の具体について参会の皆様には十分にご理解いただけたのではないかと考えている。

最後に香川大学教育学部同窓会松楠会 西山 徹 会長から講演会全体を振り返り、基調講演、シンポジウムの内容を簡潔、かつ分かりやすく総括していただき、講演会はお開きとなった。

今回の公開講演会の実現のためにご協力をいただいた関係各位にこの紙面を借りて感謝申し上げます。
(文責：齋藤嘉則)



香川大学教育学部の各附属学校園より、2018年度の実践研究の取り組みについてご報告いただきます。

附属幼稚園

第63回 附属幼稚園研究大会 報告

研究主題 保育する ～子どもとつくる明日～

1 研究主題について

子どもたちが身の周りの人やもの・ことと多様に関わり、それらの関係性の中で自分の思いや考えを生き生きと表出する主体的な子どもと、それらの関係性を捉え援助について考える中で自らも成長し向上し続ける保育者集団の絡み合う生活そのものを『保育する』という動態で捉え、保育実践の質の向上を追究した。

いや、泥団子にびったりの、いい土になってきたよ



平成31年1月25日・研究会での遊び様子

違う土も混ぜよう！水が少し多かった？

2 研究の成果

3歳児

床を水湿しにする

6月:水 記録 10月:友達

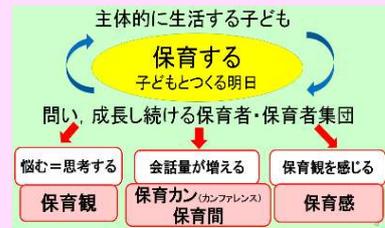
○保育者一人一人が生活や遊びの中で感じた「おもしろい」という視点に重点を置いて事例を書き起こすことから自分なりの保育観の変容の過程を見つめ『保育する』について追究することができた。

○互いの保育観を絡み合わせる中で、子どもに育てたい資質・能力を考え、そのための環境や援助について考えていくことの大切さを共通理解できた。

似た行為でも表出の意味が違う。6月は水ともっと関わりたいという思いの表出。10月は友達と遊びたいのに上手くいかなかった気持ちの表出。友達関係を紡いでいく子どもと保育者としての私、双方の伸びしろを感じた。

3 研究の成果・課題

保育者の中に右図に示す3つの『保育かん』が深まり、日々の生活や遊びの中で、子どもたちの主体的な姿と保育者の関わりが関係し合う保育の実践ができるようになった。引き続きその関係性について研究し、保育の質を高めていく。



附属幼稚園 高松園舎

初等教育研究発表会 報告

研究テーマ 主体的・対話的で深い学びの生まれる保育



幼小交流活動「みんなとことんあそぼう！」

昨年度に引き続き研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの生まれる保育」のもと、子どもと自然との関わり事例研究をすすめてきました。

研究会当日は、一伝えあって つながって仲間と作る楽しい生活—をテーマに4・5歳児の保育および5歳児と2年生の幼小交流活動「みんなとことんあそぼう！」を公開し、今年度から分科会も開催し保育について議論を深めました。“見守る”をキーワードに討議なども交え議論し、参会者からも活発な意見がよせられました。

講演では 共立女子大学 田代幸代先生が「主体的・対話的で深い学びの生まれる保育」のテーマで当日の保育の写真を交えながらお話しいただき参会者からも好評でした。

附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けると共に、実践を通して提案していきたいと考えています。

今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしく願いいたします。

センター長あいさつ
2019年度 教職センター事業計画
「特集」第19回学部 附属学校園
教員合同研究会を終えて

研究グループ報告 ①～⑧

研究グループ報告 ⑨～⑮

平成30年度 教育実践集中講座 報告
実地教育この1年2018

平成30年度 公開講演会 報告
（附属学校園この1年2018
附属幼稚園 附属高松園舎）

附属学校園この1年2018
（附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中）

附属学校園この1年2018
平成30年度 センター協議会 報告
（附属特別支援）
寄贈図書

本校は、平成25年度より文部科学省研究開発学校、そして昨年度より教育課程特例校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。テーマにある「未来」とは、多様な「ひと・もの・こと」と豊かに関わりながら、個性豊かな子どもたちが創り出すその時々最適解であると同時に、それらの問題解決を経験していくことによって、子どもたち一人ひとりが“より自分らしく成長していくこれからの姿”でもあります。つまり、私たちが求める子ども像は、多様な価値観や背景をもつ仲間と分かち合いながら自分を磨き、どのような時代、場所、集団にあっても、自らの生き方・在り方を深化させていく姿だと捉えています。

そこに向かうために必要な資質・能力として、以下の3つの力を設定し研究を進めてきました。

- 夢や憧れをもち、自律的に **学び続ける力** ○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に **関わる力**
 ○問題を解決し、知や価値を **創造する力**

上記のような資質・能力を養うために、私たちはカリキュラムを「教科学習」と「創造活動」の2領域から構想し、子どもの「自律的に学び続ける姿」「共感的・協同的に関わる姿」「知や価値を創造する姿」を常に意識しながら指導や支援にあたってきました。そうした取り組みを続けてきたことで、各教科の重要な概念を理解することに留まらず、学校生活の様々な場面で3つの資質・能力を発揮する子どもの姿が見られるようになってきました。

初等教育研究発表会では、このような本校独自の2領域カリキュラムに基づき、教科学習、創造活動及び部活動の公開を行いました。2日間合わせて、県内外から1,500人の参加者があり、本校の研究及び子どもの姿に対して、様々な観点からのご質問やご意見を頂く中で、改めて本校が大切にしていけるべき点が見えてきました。



主体的、共感・協同的、創造的に学ぶ子どもたち

今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。

研究主題 **互いに磨き合い、学び続ける子供の育成（1年次）**
 — 個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり —

1 研究会の概要

平成31年1月24日（木）、25日（金）に、第101回教育研究発表会を開催いたしました。2日間合わせて18本の授業を公開いたしました。加えて、1日目は、上智大学教授の奈須正裕先生より、「資質・能力の育成とメタ認知」と題して、全体講演をいただきました。2日目は、香川大学の齋藤嘉則先生、坂井聡先生、植田和也先生、岡田涼先生より、今求められる授業づくりについて、メタ認知と専門分野を関連付けながらご講演いただきました。その後のシンポジウムでは、第6学年道徳科の全体授業を基に、「互いに磨き合い、学び続ける子供の育成」について、活発な意見交換が行われました。



シンポジストの先生方による活発な意見交換

2 研究主題等について

県学習状況調査の結果より、県及び本校共に、子供たちの学習意欲を向上させていくことが課題となっていることが分かりました。その結果も踏まえて、子供たちの学習意欲をさらに高めていくこと、新学習指導要領に示された資質・能力を育成することを目指して、「互いに磨き合い、学び続ける子供の育成」を研究主題としました。授業ごとにその姿を具体的にイメージしながら、実践を積み重ねています。その育成に向けて、メタ認知を促す働きかけを行うことで、主体的に課題を設定し、協働しながら課題を解決していただくだけでなく、そのような学び方のよさを実感できるようにしています。



全体授業（6年・道徳科）

3 成果と今後の方向

ご参加者の方々より、「自分を振り返ることを、一つの授業の中で何度も繰り返す重要性がよく伝わってきた」「個の発達に応じて、どのような姿が見られればよいか、それをどのように見取るのか、とても興味があるので、今後も研究を続けてほしい」など、次年度研究に向けたご示唆を含んだ、貴重なご意見を多くいただくことができました。今後は、個の発達に応じ、メタ認知を促す働きかけをより効果的なものにし、全ての子供が意欲的に課題の解決に取り組むことができるよう、研究をさらに深めていきたいと考えています。

附属高松中学校

研究開発成果と課題（4年次）報告

研究開発課題

これからの時代に必要な資質・能力「コミュニケーション能力」「創造的思考力」を育成するための新領域「創造表現活動」を設置し、表現に関する教育の充実を目指した教育課程の研究開発

本校は、文部科学省から4年間の研究開発学校指定（平成27年～平成31年3月）を受け、新領域「創造表現活動」を創設したカリキュラムを開発しました。創造表現活動は、相手意識をもったよりよい表現を追求する『プラム』と、自己の生き方・在り方を問い直し、価値の更新につなげる『人間道徳』で構成されています。

10月26日には、研究開発公開授業を開催し、県内外から多くの先生が参会されました。公開授業の中では、夢中になって表現課題に取り組む生徒の姿や、体験を通して学んだことを語り合う生徒の姿を見ることができました。その後の研究協議会では、本校カリキュラムの今後の可能性や課題、これからの学校現場にどのようにこのカリキュラムが生かされるかなど、様々なご意見をいただきました。

創造表現活動



附属坂出中学校

本校の研究について

研究主題

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」
—主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして（第一次終了）—

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を続けてきた。今年度6月の研究発表会では、「深い学びを生み出すための問いのあり方」、「聴き手を育てる教師のかかわり方」を通して構築される「主体×主体の関係」が、「ものがたり」の授業における深い学びを生み出すことを提案した。

後期からは、研究発表会における成果と課題をもとに、次の3点を意識した「ものがたり」の授業実践を行い、研究を進めている。

- ① 題材に対する生徒の「当たり前」を把握し、その考えの変容を明確化すること
- ② 生徒に任せた語り合いを通して、題材に対する新たな「ものがたり」を生み出すこと
- ③ 題材と自己との関連を見つめ直し、「自己に引きつけて語る」ことで、学びの意味や価値の実感につなげること

また、本年度より研究開発課題「予測できない未来に対応して生き抜く能力を育てるため、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力で解決し、自己の成長や可能性を実感していく異学年合同の『共創型探究学習(CAN)』を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発」とし、文部科学省から4年間の研究開発学校指定を受け、研究を進めている。



研究発表会での授業の様子

研究主題 「育てたい力」の育成をめざすカリキュラム・マネジメント
～小・中・高のつながりを意識した学習内容の充実をめざして～

特別支援学校学習指導要領の中で、障害のある人のライフステージ全体を豊かなものとするために、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図ることが示されています。そこで、本校の子どもたちに「育てたい力（＝自立して生きる基盤となる力）」の育成につながるカリキュラム・マネジメントを行うこととし、学習指導要領の改訂の方向性でもある「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点で、研究を進めています。「育てたい力」を育むために、それぞれの発達段階に応じた学習内容を検討するとともに、小・中・高の系統性をもたせ、それらの学びが卒業後の豊かな生活へとつながる授業改善、教育課程の検討をめざしています。

今年度は、小・中・高の学部を越えた縦割り班で授業検討や討議を行い、他学部の取組を知ったり、学びのつながりを意識して学習内容を見直す視点をもったりすることができました。そこでの意見も参考にしながら、学部の年間指導計画の見直しを行っています。

今年度見直した教育課程を来年度の実践の中で評価していくことや、何ができるようになったか、学習成果を的確に捉え、個別の共働支援計画の評価・改善と教育課程の改善をつなげていくことは、今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。

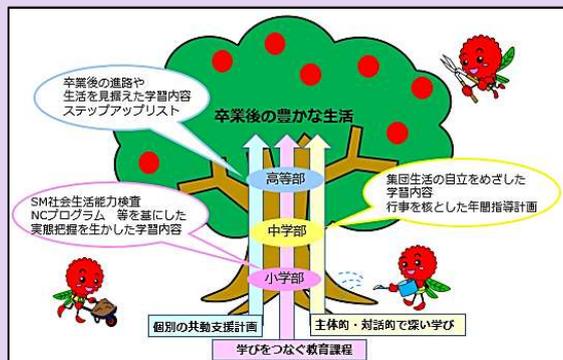


図1 本校の研究でめざすもの

平成30年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

第93回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成30年9月27日(金)に宮城教育大学を会場として開催されました。開会では、東原会長と会場校である宮城教育大学 前田副学長様より挨拶がありました。

その後、「震災伝承と防災人材育成ー教員養成に向けられた期待ー」と題して、宮城教育大学 防災教育未来づくり総合研究センター 小田隆史先生よりご講演をいただきました。ご講演では、防災リテラシーを有する教員をいかに育てるのかについて、東日本大震災を教訓に進められている宮城教育大学の多様な取り組みが紹介されました。近年大きな災害に遭うことのない香川県の大学であっても、防災リテラシーを有する教員養成が喫緊の課題であることを痛感させられました。

昼食をはさみ午後からは、前回の議事録確認、各部門会議からの報告、会計に係る報告、2017年度事業の部門報告ならびに2018年度事業計画について報告がありました。その後13時50分より、各センターの報告と連絡がありました。各大学センターの役割や組織が多様化していることをうかがわせる情報共有・交流の場となりました。

閉会後に部門会議が開催されました。教育工学・情報教育部門では、小学校におけるプログラミング教育の実施に向けた教員養成大学としての対応などについて、各大学の取り組みについて情報交換が行われました。(文責：松下幸司)

第94回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成31年2月15日(金)に東京学芸大学を会場として開催された。開会では、東原会長の挨拶、中島東京学芸大学副学長の挨拶があった。議事・報告では、前回の議事録確認、各部門報告、会計報告があり、新年度からの役員体制について提案があった。議論では、とりわけ現在教職大学院をはじめとする各大学での様々な改組によるセンターの位置づけの曖昧さ(他の組織に再編、等)の中、本会議が今後どのような役割を担っていくのかが問われた。こうしたことも受け、その後の東原会長の講演では、センター協議会設立からの動向や歴史がレビューされ、その上で、近年のSociety 5.0をめぐる動向を踏まえつつ改革していくことが重要なのではとの認識が示された。そしてこの観点から、2019年度に議論していくことになった。これまでの3部門体制も見直し、2020年度より新しいセンター協議会として動きだしていくことになると思われる。

午後からは、各センターの動向について情報交流会が行われ、参加全センターからそれぞれの現在の状況、改組情報、センターが抱えている課題、今後の見通し等の報告があった。どの大学も教職大学院の拡充に伴う再編が行われ、人の動きや職務内容も大きく変わろうとしているようである。その中で香川大学は、教職支援や学部の実地教育に力を注いでおり、ここに他の大学とは異なる独自性を感じ取ることができた。今後も他大学との情報交流を密にとっていくことの重要性を感じた。なお、情報交流会に先立ち、急遽「センター紀要」の在り方について静岡大学より問題提起があり意見交換が行われた。実践研究とは何か、が問われているように思われた。

閉会後に部門会議が開催された。参加した教育実践・教師教育部門では、上述の情報交換会の内容をより深めるかたちで、各大学との情報交流を行った。(文責：山岸知幸)

寄贈図書 (2018/04/21~2019/04/20)

教育実践総合センター紀要 第35号 2017 平成30年2月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第37号 平成29年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
群馬大学教育実践年報 第7号 2017年	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
立正大学 臨床心理学研究 第16号 2017年度	立正大学心理臨床センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.17 2018.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第18回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム 学びの原点に立ち返る —「理科」と「社会科」の間—	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
心理相談研究紀要 第16号 2017年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第27巻 2017	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
岐阜大学教育学部 特別支援教育センター年報 第25号	岐阜大学教育学部 附属特別支援特別支援教育センター
鳥取大学教育研究論集 第8号 2018年	鳥取大学 教育支援・国際交流推進 教員養成センター
心理臨床事例研究 愛媛大学心理教育相談室紀要 第14号 2018年4月	愛媛大学教育学部 附属教育実践総合センター 心理教育相談室 愛媛大学大学院教育学研究科 学校臨床心理専攻 臨床心理学コース
愛媛大学教育実践総合センター 紀要 No.36 2018	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
教育方法学研究 日本教育方法学会紀要 第43巻 2017	日本教育方法学会
生徒指導上の諸課題の現状と文部科学省の施策について	文部科学省初等中等教育局児童生徒課
琉球大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第25号 2018	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
平成29年度 子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践 ボランティア」事業に関する実践報告書 第22号 平成30年3月20日	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
学校教育実践学研究 第24巻 2018	広島大学大学院教育学研究科 附属教育実践総合センター
平成29年度広島大学教育学部フレンドシップ事業 ゆかいな土曜日 実施報告書 平成30年3月	広島大学教育学部 フレンドシップ事業運営委員会
ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター紀要 2018 Vol.11	ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター
札幌学院大学 心理臨床センター紀要 第18号 2018年7月	札幌学院大学心理臨床センター
教育実践研究 第44号 平成30年10月	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第18号 2018年	国立大学法人 横浜国立大学
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第13号 平成30年12月	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No.33	鳴門教育大学 地域連携センター
花園大学 心理カウンセリングセンター研究紀要 【第13号】 2019	花園大学 心理カウンセリングセンター
平成30年度学位論文 地域学習教材としての「四国遍路」の現状と課題 —香川県の小・中学校を事例として—	香川大学大学院教育学研究科 川人 有史
研究紀要 第46号 平成31年	広島県立教育センター
心理相談研究紀要 第17号 2018年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.18 2019.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第19回シンポジウム記録集 これか らの学校教育と教員養成カリキュラム 教員の「学び」と「育ち」を問い直す	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
山形大学 教職・教育実践研究 第14号 2019年3月	山形大学教職研究総合センター
群馬大学教育実践研究 第36号 2019年3月	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
中等教育研究紀要 第65号 2018	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第32号 2018年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
教育実践総合センター紀要 第36号 2018 平成31年3月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第38号 平成30年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
長崎大学教育学部教育実践研究紀要 第18号 2019年3月	長崎大学教育学部
次世代教員養成センター研究紀要 第5号 2019.3	奈良教育大学 次世代教員養成センター
広島国際大学心理臨床センター紀要 第17号 2018	広島国際大学心理臨床センター
夢 平成30年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書	山口大学教育学部

センター長あいさつ
「特集」2019年度教職センター事業計画
第19回学部・附属学校園
教員合同研究会を終えて

研究グループ報告 ①～⑧

研究グループ報告 ⑨～⑮

平成30年度教育実践集中講座 報告
実地教育この1年2018

平成30年度公開講演会 報告
附属学校園 この1年2018
(附属幼・附属幼高松園舎)

附属学校園 この1年2018
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

平成30年度センター協議会報告
寄贈図書
附属学校園この1年2018
(附属特別支援)

教職支援開発センター活動報告(2018/10/01~2019/04/20)

<平成30年度>

10月16日(火) 第六回専任会議
10月19日(金) 教育実践集中講座(第二期1回目)
10月20日(土) 公開講演会
10月24日(水) 教育実践プレ演習第四回全体授業
11月13日(火) 第七回専任会議
11月19日(月) 教育実践集中講座(第二期2回目)
教育実践集中講座(第二期3回目)
11月21日(水) 教育実践演習第七回全体指導
11月22日(木) 教育実践集中講座(第二期4回目)
11月28日(水) 教育実践演習第八回全体指導
教育実践集中講座(第二期5回目)
11月30日(金) 教育実践集中講座(第二期6回目)
12月3日(月) 教育実践集中講座(第二期7回目)
12月6日(木) 第三回編集会議
教育実践集中講座(第二期8回目)
12月10日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
12月11日(火) 第八回専任会議
12月12日(水) 教育実践集中講座(第二期10回目)
12月21日(金) 第四回編集会議

1月15日(火) 第九回専任会議
第五回編集会議
教育実践集中講座(第二期11回目)
1月21日(月) 教育実践集中講座(第二期12回目)
教育実践集中講座(第二期13回目)
1月23日(水) 第六回編集会議
1月28日(月) 教育実践集中講座(第二期14回目)
2月13日(水) 第一回教職支援推進部門会議
2月15日(金) 第9回国立大学教育実践研究関連
センター協議会
2月19日(火) 第十回専任会議
2月20日(水) 第一回教育開発推進部門会議
2月21日(木) 第一回実地教育推進部門会議
3月4日(月) 第19回学部・附属学校園教員合同研究集会
3月5日(火) 第十一回専任会議
3月7日(木) 第二回運営委員会

<平成31年度>

4月10日(水) 特別支援教育実践演習全体指導
4月11日(木) 教育実践演習 第一回全体指導
4月16日(火) 第一回専任会議
4月18日(木) 教育実践演習 第二回全体指導

教育実践総合研究(第40・41号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第40号は**2019年11月29日(金)**原稿受付締切、第41号は**2020年5月29日(金)**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

(1) 採録

(2) 条件つき採録

(3) 返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 7)

発行日 令和元年6月10日

代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>

